

＜前回＞解放の神学と宗教社会主義

(1) バルトの宗教社会主義批判

1. スイスやドイツにおいてなされたキリスト教と社会主義との積極的な関係づけの試みとしての宗教社会主義。クッター、ラガツ
2. カール・バルト：
 - 自由主義神学、ザーフェンヴィルの労働問題、宗教社会主義運動
 - 第一次世界大戦における戦争政策に対する神学者を含むドイツ知識人の公然たる支持、ドイツのキリスト教社会主義の愛国主義運動への転換。
 - 宗教社会主義から弁証法神学への転換：新しい世代の神学者において共有。
4. 批判の論点：宗教社会主義がその正しさを主張する際に、「キリスト教的」「宗教的」と述べる。「宗教的」と主張することによって、政治という「この世」の事柄を宗教的神学的に正当化しようとするあり方。
 - 「神の判決と審判」、「神の革命」を、あたかも自らの力で（「別の革命」として）遂行しようとするところに、「革命家の悲劇」(Barth, 1922, 464) と不義が存在する。
 - 宗教社会主義における「宗教的」と「社会的」を「宗教的—社会的」という仕方で結合する「ハイフン」が人間の不遜（巨人主義）であるとの批判
5. 『ローマ書講解』の基本的認識：「神は天にいまし、汝は地上にいる！」(ibid., 294) との神と人間の「無限の質的差異」に基づいている。バルトにおける政教分離原則の徹底化。
6. バルトにおける政教分離原則は、単に国家と教会を原理的に区別するにとどまらず、むしろ、両者の区別が生じるその根源から、いわば逆説的にキリスト者の政治的实践を生み出すものとなったのである。キリスト教の弁証は、特別な弁証神学によって遂行されるのではなく、神学が真に教会的神学に徹するところにおいてこそキリスト教の弁証は有効になされる。

(2) ティリッヒと宗教社会主義

3. ティリッヒの宗教社会主義論

『社会主義的決断』（1933年）の宗教社会主義論

1933: *Die sozialistische Entscheidung*, in: Paul Tillich. *MainWorks.3.*

4. 基礎的人間学：社会的構想力 → 政治思想の二つの系譜
 - 「世界—内—存在」（「自己—世界」、「運命—自由」）「被投性—企投」
 - 「起源—要請」、起源神話とその突破（預言者、ヒューマニズム）→ 起源の両義性
 - 実体原理（形成原理）と修正原理（批判原理）

↓

政治的ロマン主義（保守的あるいは革命的）とその意義

自由主義・社会主義とその限界

↓

宗教的社会主義の課題：社会主義と起源の力の再統合、合理性と非合理性

5. *Protestantismus und Politische Romantik*, 1932, in: Paul Tillich. *Gesammelte Werke. Band II.*
 - 「この起源神話的な意識が、政治におけるあらゆる保守的でロマン主義的な思惟の根なのである」(Tillich, 1933, 291)。特に、民族起源神話は、民族共同体の起源を血や地において象徴的に表現し、共同体の自然的な絆を意識可能な仕方で提示する。したがって、共有された起源の意識に依拠した政治的ロマン主義——その保守的形態と革命的形態を含めて——は、「歴史的に制約された政治理論以上」(Tillich, 1932, 209) のものである。

↓

イデオロギー：ここに政治的ロマン主義の力の秘密が存在するのである。

6. 起源神話のイデオロギーに対する批判：預言者的また合理的

預言者は、共同体を担う起源の力の聖性を「当為の審判」のもとに置き、「超越的起源への関わりを人倫的要請の成就に依存させ」(ibid., 210)、これによって、起源神話を相対化する。しかし、「神話的なものが初めて取り除かれたのは、人文主義において、自律の土台の上においてであった」(ibid.)。自由主義、民主主義(議会制)、社会主義——これらは、実体原理としての起源の力に対する批判原理、修正原理に相当する——は、こうした起源の力を破る要請の意識(→超合理的また合理的批判)に基づく政治思想であって、それらは近代の人文主義の成立を前提とした合理的精神性の産物だった。

7. 宗教と政治は、人類史の長きにわたって、常に密接な関係を有してきたのであり、近代的な政教分離論に依拠し、この両者の関係の根本に踏み込まない議論は、政治的ロマン主義の前にあまりにも無力であると言わざるを得ない。

(3) 解放の神学とその多様性 → 「解放の神学」系

1. キリスト教的理念：隣人愛、平等、平和

+

終末以前・地上における現実化(人間の責任・使命)

↓

キリスト教の実践的課題 → 近代的状況：社会分析・社会批判(合理性)の要求

2. キリスト教社会主義：貧困・格差、労働運動 cf. マルクス主義との関わり

イギリス→アメリカ→日本

宗教社会主義：スイス・ドイツ

3. 第二次世界大戦後：地域と伝統、問題領域における多様な動向

ローマ・カトリック教会の労働司祭運動：フランス、韓国

解放の神学：ラテン・アメリカから

4. Christopher Rowland (ed.), *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Cambridge University Press, 2007(1999).

5. Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.

(4) 基礎的共同体と教育・言葉・意識化

6. 解放の神学：理論と実践、抑圧・搾取の克服(抑圧者と非抑圧者の双方を変える→リユースの「新しい人間性」)

↓

共同体形成・共同体の中での個。焦点としての「教育」

7. 解放の教育：パウロ・フレイレ (Paulo Freire, *Pedagogy of the Oppressed*, Penguin Books, 1972(1970))

8. 脱学校化：イヴァン・イリッチ (Ivan Illich, *Deschooling Society*, Pelican Books, 1971(1970).)

9. 教育センター・インディゴ書院のプロジェクト(グローバル・ヒューマンにティーズ・プロジェクト)。釜山。

10. 解放の神学の挑戦は続く

Thia Cooper (ed.), *The Reemergence of Liberation Theologies. Models for the Twenty-First Century*, Palgrave, 2013.

4. フェミニスト神学

「解放の神学」系の中での焦点の一つ。「男一女」というコードをめぐる多様な展開。

(1) フェミニスト神学の背景

0. 女性解放の歴史と類型

生駒孝彰『神々のフェミニズム——現代アメリカ宗教事情』荒地出版社、1994年。

第一章 教父時代から宗教改革へ

第二章 アメリカ——植民地から新国家へ

第三章 南北戦争後のアメリカ宗教界

第四章 激動の一九六〇年代から八〇年代

第五章 九〇年代は

Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk. Towards a Feminist Theology*, SCM Press, 1983.

9. The New Earth: Socioeconomic Redemption from Sexism

Liberal Feminism / Social Feminism / Radical Feminism

/ Is there an Integrative Vision of Society?

1. ユング：三位一体の象徴（キリスト教に規定された西洋文化圏における完全な自己の象徴）は完全(vollkommen)であるが、十全(vollständig)ではない。

（ユング「三位一体の教義にたいする心理学的解釈の試み」（1948）（林道義訳『心理学と宗教』人文書院、1989）。

↓

三位一体の象徴はそれ自体としては、完結したまとまりを有しており、完全な自己の象徴として機能しうるものであるが、そこには欠けているものがある。西洋文化の根本的な問題。女性原理あるいは身体原理の排除（キリスト教の三一神論は古代の女神の要素を排除することによって形成された）。

↓

女性や身体理解のゆがみ、悪の問題におけるアポリア

2. 1960年代以前のフェミニズムが主として男性中心の社会システムにおける女性の権利獲得を目指していたのに対して、この30年間のフェミニズムは社会システム全般に対する異議の申し立てを超えて、それを支え正当化している価値観や世界像の批判へと進み、文化や意識のレベルでの変革を追求するに至っている（大越、1997）。

①キリスト教が直接的あるいは間接的に女性に対する不当な暴力に荷担し、それを正当化してきた点について。例えば、魔女裁判の場合。

②キリスト教が男性優位の価値観を制度化し、構造的に女性の権利を抑圧してきた点について。女性の聖職者への叙階に関する制限など。但しこの制度化は意識的になされている場合だけでなく、無意識あるいは自動的に行われているものに注目する必要がある。

③男性中心の価値観の枠内における理想の女性像を女性に押しつけてきた点について。自己犠牲的愛、謙虚さ、従順さなどを女性の美德として奨励し——イエスの十字架はこうした理想的女性の規範として使用される——、大胆に自己を主張し権利を求める女性を自己矛盾に陥らせる（つまり、自己規制を要求する）、あるいはこうした女性に対する他の女性の反発や攻撃を助長する。

④女性は自らの宗教経験を表現するにも男性中心の言語を用いざるを得ない。女性は自らの言語すら奪われている。

3. フェミニズムの問題提起 → フェミニスト神学

フェミニズムの問題意識を共有しつつ、新しいキリスト教の形成を目指す神学運動として展開されている。そこには、キリスト教の徹底的な否定論から伝統の再生論まで多様な議論が交錯している。

4. 争点としての聖書解釈の問題（フェミニスト的聖書解釈）

「この探求の出発点は、共観福音書のイエスとの出会い、つまり彼について蓄積された教義ではなく、彼のメッセージと実践でなければならない。」（Ruether, 1983,p.135）

日本におけるフェミニスト神学も、この聖書解釈という場を中心に展開してきた。

絹川久子『聖書のフェミニズム 女性の自立をめざして』ヨルダン社、『ジェンダーの視点で読む聖書』日本キリスト教団出版局。

フィリス・トリブル『フェミニスト視点による聖書読解入門』新教出版社。

5. 対照的で代表的な論者として次の二人に注目

デイリ (Mary Daly, 1928-2010) と リューサー (Rosemary Radford Ruether, 1936-)

アメリカ、白人、リベラルなキリスト教という文脈、そしてこの文脈を超えた展開。

6. 神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている点に関して。

デイリ (Daly, 1973) は、イエスは男性であり、それゆえ女性の生き方の規範になり得ないと主張する — イエスは過去の人物であり、現代人の規範にはなり得ない、そもそも人間は自分自身の人生を生きねばならないのであって、他人を規範とすることはできない —。

7. 真の人間、規範的人間としてのイエスの否定であり、イエスの神性の否定をさらに超えた徹底的なキリスト教批判。

8. リューサー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して、フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。

9. リューサー (Ruether, 1983, 116-138)。古典的キリスト論（カルケドン公会議の）は、贖われたメシア的王の思想と神と人間を結びつける神的知恵の思想とを基盤に成立したが、その際に男性象徴（男性としてのイエス）が選ばれた。

↓

イエスという歴史的人物が男性であったことと、神の子あるいはロゴスが男性であることとの間に必然的かつ存在論的な関係があるという考えが派生

↓

女性原理が神象徴の中から排除される。

10. イエスの宗教運動から家父長的なキリスト論（正統キリスト論）の成立という 400 年以上のわたる歴史的なプロセス（キリスト論の家父長化）は、イエスの宗教運動からの変質であり、それは、他のキリスト論の諸様態の排除によって可能となった。

11. イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と相関しうるキリスト論）。

フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し、続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方で生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。

↓

イエスの宣教した神の国は国家主義的でも彼岸的でもない。神の国は支配と被支配、抑圧と服従の構造を乗り越えるものとしてこの地上に到来する。イエスはメシア的預言者を王的にではなく、僕として象徴化する。イエスは当時のユダヤ社会において制度化

されていた様々な差別抑圧構造と戦わざるを得なかった。

12. リューサーが注目するのは、神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者の千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。
- ・イエスに女性的あるいは母的な属性を与える両性具有的キリスト論。その背後には、両性具有人の神話が潜んでおり、グノーシス主義のキリスト論から中世の女性神秘主義者（ノーリジのジュリアンなど）のキリスト理解を経て、近代のベームやスヴェーデンボルグの神秘主義、そしてロマン主義に影響。
 - ・モンタノス運動から中世のフィオーレのヨアキムの影響を受けた諸セクト（14世紀のペギン会系のセクトなど）や18世紀のシェーカーの運動に至る預言者的運動においては、霊的キリスト論が展開されてきた。
14. 「支配-従属」のモデルに規定されないキリスト論（フェミニスト的キリスト論）の再構築。

「解放者として語るイエスの能力は、男であることに存するのではなく、この支配の制度を批判し、彼自身の人格の中に、奉仕と互いの法的権限を認め合う新しい人間性を具現しようとした、その事実に存するのである。……神学的に言って、イエスが男であることは、究極的な重要さを持たないと言えるかもしれない。それは、家父長的特権を認める枠組みの中で、社会的象徴的意味を持つだけである。この意味で、解放された人間の代表であり、解放を促す神の言葉であるキリストとしてのイエスは、家父長制のケノーシスと新しい人間性の宣言を顕わにする。この新しい人間性は、ヒエラルキーに基づく社会的地位の特権を捨て、低き者のために語る生き方を通して宣言されるのである。」

(ibid.,137)

12. フェミニスト神学の二つの選択、キリスト教の外へ、あるいはキリスト教の内部で
- | | |
|----------------|-------|
| ラディカル・フェミニスト神学 | |
| デイリー | リューサー |

(2) フェミニスト神学の展開＝可能性

1. エコフェミニスト神学

Rosemary Radford Ruether, "Ecofeminism: The Challenge to Theology," in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press, 2000. pp. 97-112.

リューサー「エコフェミニズム——神学への挑戦」

エコフェミニズムは、古典的なキリスト教神学と、家父長的な世界観によって形成されたすべての古典的宗教とに対する徹底した挑戦であるが、この論文では、古代の中近東とギリシャローマ世界の世界観に根差したキリスト教に焦点が絞られる。

エコフェミニズムは女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指しているが、性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性には、文化—象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在している。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。つまり、後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）によって与えられるという連関である。

2. エコロジカルな意識として生じた徹底化の文脈にフェミニスト神学を組み込むこと。

1) 自己論（人間理解）

- ・プラトニズム的な心身二元論への挑戦

人間は長い進化プロセスの子孫であり、多様な有機体の諸レベルにおける物質—エネルギー

一の動態の連続性（無機的エネルギーから生命、生命の自覚、有機体における反省的な自己意識へ）に基づいている。

ホモサピエンスの出現と支配・搾取。スチュワードシップは、最初の命令ではなく、支配的男性の事後的な努力（乱用を正し、よりよい支配者となる）。反省的自己意識とは分離可能な存在論的実体ではなく、脳—身体に不可欠でそれとともに死ぬ我々の内面性の経験である。不死性は、個的意識の保持にあるのではなく、終わることなく循環する物質—エネルギーの奇蹟・神秘にある。

エコロジカルな自己意識

宇宙プロセスの全体を祝福し、我々の生命を地球共同体全体の生命と調和させることが必要である。これは、相互限定と交互的な生付与的はぐくみの霊性と倫理を要求する。

2) 悪と救済

悪の存在しない原初のパラダイスと、悪と死が克服される未来のパラダイスという前提を放棄すること。

ブラジルのエコフェミニスト、イボンヌ・ゲバラ (Ivone Gebara) を参照しつつ、議論がなされる。

・悪は常に我々と共にある。

罪は、可死性、有限性、脆弱性から逃避しようとする努力のうちにある。逃避の欲望は、他の人間や土地や動物を独占しようとする力ある男によって有害な形が与えられる。非脆弱さ確保しようとする努力が他者や地球を犠牲にして力を蓄えようする際限のないプロセスを強いる。ターゲットしての女性。

女性・身体・地球の支配とそれからの逃亡＝自らの否定された有限性の克服とそれからの逃亡

これが、歪曲のシステムを生み出す。支配と歪みのシステムが罪である。

↓

救済とは、歪みのシステムを廃棄することによって、そうすることによって、相互に命を与え合う共同性を期待できるようになる。

誤った逃亡主義から解放された終末的希望のヴィジョン

様々な悲劇の只中で豊かな喜びを共に享受すること、限界や過ちや事故をも等しく分かち合うこと。

罪（他者を犠牲にすること）とハン (Han、犠牲にされた者の痛み) に根差した逃亡主義的自己と救済史を破棄すること。

3. 女性の経験から女性たちの経験へ

多様な文脈へ、ラテンアメリカのフェミニスト神学、ウーマニスト神学、アジアのフェミニスト神学

Stacey M. Floyd-Thomas and Anthony B. Pinn (eds.), *Liberation Theologies in the United States. An Introduction*, New York University Press, 2010.

5 Asian American Feminist Theology (Grace Ji-Sun Kim)

6 Native Feminist Theology (Andrea Smith)

9 Gay and Lesbian Theologies (Robert E. Shore-Gross)

10 Feminist Theology (Mary McClintock Fulkerson)

「八〇年代以降、黒人女性の中にウーマニスト神学」「カトリック・ヒスパニック女性によるムヘリスタ神学や、先住民女性の神学的冒険」「フェミニスト神学も、ウーマニスト神学やムヘリスタ神学の誕生によって、これまでの言説と実践を大幅に見直す必要に迫られて

いる。」(栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社、2004年、102)

4. 第一世代から次の世代へ

Susan Frank Parsons (ed.), *The Cambridge Companion to Feminist Theology*, Cambridge University Press, 2002.

Mary McClintock Fulkerson and Sheila Briggs (eds.), *The Oxford Handbook of Feminist Theology*, Oxford University Press, 2012.

5. フェミニスト神学から多様な「性」の神学へ

クィア理論 → クィア神学

Elizabeth Stuart, *Gay and Lesbian Theologies. Repetitious with Critical Difference*, Ashgate, 2002.

パトリック・S・チェン『ラディカル・ラブ——クィア神学入門』新教出版社、2014年。

・「クィア」:「奇妙な、不思議な、特異な、異様な」

侮辱的な意味から、「中立的あるいは肯定的意味へ」、1980年代後半から「レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックス、クエスチョニング・・・」 「包括的用語」

「物事を超越していく働きとして」

朝香知己「クィア神学の可能性——その課題と展望」(日本基督教学会『日本の神学』50、2011年、55-73頁)。

<参考文献>

1. 大越愛子『フェミニズム入門』ちくま新書、『女性と宗教』岩波書店。

2. 日本フェミニスト神学・宣教センター:

<http://cftmj.cocolog-nifty.com/blog/cat2537789/index.html>

3. Susan Frank Parsons (ed.), *The Cambridge Companion to Feminist Theology*, Cambridge University Press, 2002.

4. Mary Daly, *The Church and the Second Sex*, Beacon Press, 1968(1985).

(『教会と第二の性』未来社)

In Beyond God the Father. Toward a Philosophy of Woman's Liberation, Beacon Press, 1973.

5. Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk. Toward a Feminist Theology*, SCM

Press,1983. (リユースー『性差別と神の語りかけ フェミニスト神学の試み』新教出版社。)

, 『人間解放の神学』新教出版社。

, 『マリア 教会における女性像』新教出版社、1983年。

, *Gaia and God. Ecofeminist Theology of Earth Healing*, HarperOne,1992.

6. 芦名定道「現代思想とキリスト論」、水垣渉・小高毅編『キリスト教論争史』日本基督教団出版局、2003年、529-567頁。

7. 熊澤義宣・野呂芳男 編『総説 現代神学』日本基督教団出版局。